

島津齊彬公と玻璃製造

黒田清輝

島津齊彬公は、維新の大事業に先ち、又我邦今日の文明の先驅として種々な方面から、西洋の事を研究なされたのである、其御研究は總て大分御念入で有つたが、其の當時は家臣共さへ御思召が能く分らなかつたそうです、然るに今日に爲つて見れば、御先見の程は唯々驚き入るの外はない。

ほんの一寸したことですが、今日の我邦の國旗と爲つて居る日の丸の旗も同公の御考案で出來たのが始まりだとのこと、時の御老中阿部伊勢守から軍艦に立てる旗に就て齊彬公へ御相談致された處が、夫れは日の丸が宜ろしからう、私が雛形を造らせて進ぜませうと仰せられて、藩士の肥後喜左衛門といふ人に命じて御造らせに爲つた、これに就て父の歌が有る。

日のみはたか、やく御世にならんとは

はやくもしりて

さためましけん

此の日章旗の事は、市來四郎氏が詳しく調べて書き留めて置かれたと云ふ話である。

また本邦で蒸気船を始めて造つたのも齊彬公である、是れは嘉永



黒田清輝《島津齊彬公》尚古集成館蔵

の初年の事で、薩摩の久見崎といふ所で組み立て、御船奉行の長崎勘介といふ人が、遠州灘を経て江戸へ廻航した、此の時の航海には長崎船長は餘程苦心したそうだが、さて其船が品川に着た時の見物人は大したもので、水戸の老公なども來られたそうである。

齊彬公は又寫眞術をも御研究なされた、惜しい事には其の種板などが一枚も今残つて居ることを聞かない、然し立派に成功したそうだが、此寫眞術に就ては大島圭介男にも人を以て御尋ねが有つて、同男より蘭書に記載して有ることゝ、同男自身の經驗とを詳しく申上た、すると其の後一枚の肖像が出來上つた、其肖像は中々鮮明であつたそうだが、此の時の寫眞といふのは、銀の板に水銀を燻し掛けて寫すのであつた、是等は大島男から直接に聞たのであります。

島津久光公は世間一般人が能く記憶して居るが、却て齊彬公は他國の人は知らないやうだ、是れは久光公は維新の際に御骨折になつて、齊彬公は其前に御隠れに爲つたからだらうと思ふ、齊彬公が薩摩の太守に爲られた際に、故大久保一翁氏が御政治の御相談相手に爲るやうな人物が御坐りますかと御尋ね申上げた處が家來の中に人物が無いには困り入る、然し幸に弟の周防（久光公）は學問が有つて大きに話相手になりますと仰られた、久光公は殊に御晩年には始終御書見ばかり成された、齊彬公が西洋の文明に御注意なされて色々な事を御研究なされたのは、唯の物好きと云ふやうな云はゞ慰み半分と云ふのでは無かつた、全く憂國の念慮から成された、或る時江戸詰の家老島津登と云ふ人に命じて、臺灣に牛皮大の借地をしたいといふことを支那政府へ掛合を付けるやうに幕府へ申込めと仰越されたことがある、此時の口實は領内の漁民が間々臺灣地方へ漂流することがあるから、其れ等

へ薪水を給する爲めと云ふのであるが、御志の大なることは窺はれる、又松平春嶽公が御訪問なされた時に、世界地圖に向つて日本の領土の狹隘にして殖民地の必要あることを御物語有つたそうだ。

私が極小さい時分に、母に連れられて磯といふ所の製造場を見に往たことを今微かに記憶して居る、第一非常に大きな大砲が澤山有つたのに驚いた、又其處に硝子製造紡績等の工場が有つたやうに覺えて居る、父の話に木材を截斷する機械も有つたそうだ、皆水力を利用したので有る。

嘗て故川村伯が私に語られたことがある、或る時齊彬公が磯で製造したる玻璃器を勝伯に贈られたところが、勝伯は其精巧なるに驚いて、此の製造に就ては和蘭人でも御雇ひなされしやと御尋ね申た、其處で齊彬公は微笑なされて、江戸の神明前の者を連れて歸りましたとの御返答であつたので、勝伯は其餘り意外なるに、開いた口が塞がらずと云ふ體であつた。

此の硝子製造のことを少し詳しく知りたいものと思つて、三年町の島津家に居られる寺田弘氏に依頼して、古記録を調べて貰つた、即ち左の一篇は寺田氏から送つて來たもので、市來廣貫といふ人の記録である。

紅色瓦羅斯製煉御開ノ事

紅色瓦羅斯 銅粉ヲ以テ散紅色ヲ發シタルモノノ船燈ニ用ユル紅色 及ビ透明紅色瓦羅斯 黃金ヲ以テ透明ノ紅色ヲ發スルモノ 嘉永四年辛亥ノ夏、工人四本龜次郎 四本ハ江戸源助町ニ生レ幼年ヨリ硝子工ニ従事シタリト云フ當時江戸ニ於テハ有名ノ工人ナリ 二命セラレ、創製セラレタリ。是ヨリ先キ弘化三年丙午ノ秋、鹿兒島中村騎射場趾ニ、製薬館ヲ創建セラレ、専ラ醫藥製煉ヲ開カレタリ、製煉ノ術ハ瓦羅斯器必用ナルガ故、四本ナル者ヲ江戸ヨリ雇入ラレ、製造竈ハ製薬局ノ近傍ニ建設シテ研究數月ニ互リ、數百回ノ試験ヲ經テ紅色ヲ發スルニ至レリ、其紅色藥ハ宇宿彦

右衛門中原尙介及ビ廣貫等洋書ニ基キ、工人ニ示シテ製造セシメタリ、其色澤殷紅透明種々ノ器皿ヲ製造スルニハ、紅ヲ素色トシ、青黃白紫ヲ交錯シ、琢磨シテ各色ヲ顯ス、頗ル美麗ナリ、當時薩摩ノ紅硝子ト都鄙讚賞セリ、而シテ後チ種々ノ器物製造ヲ命ゼラレ、將軍家及ビ諸侯方ヘ送遣セラレ、後は御所望ニ應ジ製造シ、其利ヲ得ルニ至リ、久シカラズシテ創製ノ費ヲ償ヒタリ、後チ安政三年丙辰ノ春、製造所ヲ集成館ニ遷サレ、一層盛大ニ製造セリ、尋デ水晶瓦羅斯ノ製造ヲ開キ、諸酸類ニ堪フベキ藥壘、又ハ板瓦羅斯ノ製造ヲモ開クベキ旨モ命ゼラレタリ、之レ亦日本ニ於テ開基ノ業ニシテ、開物ノ端緒ト謂ベシ。

因ニ記ス、紅色瓦羅斯ノ製煉ハ海内ノ創初ナリシ故、薩摩ノ紅ビイドロト唱へ、有名ノ産トナレリ。後明治五年九州御巡幸ノ際、大山縣令良綱先ニ製シタル菓子皿一ト重ヲ獻ジタリシニ、賞受シ玉ヒ、後宮内省ヲリ蓋物三組ノ御詠アリ、廣貫當時開物會社ヲ設立シ、先公ノ御遺業百工製造ヲ開キタリシ故、御詠品製造セシメ獻納セリ、是レ明治五年十二月ノコトナリキ、或ハ其時ヨリ舟船舷燈ヲ用フベキヲ命ゼラレ、紅青ノ舷燈用ノ硝子板ヲ製シテ賣販ス、大ニ縣内ノ辨利トハナレリ、是全ク公ノ賜ト云フベシ。

集成館ハ反射竈、製鐵鎔鑪、大小砲鑽開臺、鋼鐵製造場等ノ在ル所ナリ、其中ニ設ケタル瓦羅斯製造竈ハ左ノ如シ。

紅瓦羅斯製煉竈四礎 二礎ハ股紅色電即チ現今船舶ノ舷燈ニ用ル紅色ナリ銅粉ヲ以テ紅色ヲ發スル法ナリ、二礎ハ透明紅色電即チ黃金ヲ以テ紫金ヲ製シ紅色ヲ發スル法ナリ

水晶瓦羅斯製煉竈一礎 「キリストタルガラス」水晶硝子トモ唱フ

板瓦羅斯製煉竈一礎

鉛瓦羅斯製煉竈大小數礎 普通ノ瓦羅斯

硝子の製造は右の様な次第である、此の外齊彬公の御施設の諸製造の重なるものは、前にも一寸話の出た造船を始とし、製鐵、鑄砲、電信機、地雷、俄斯燈、綿火藥等一々數へ切れぬ又馬匹の去精法などまでも試験せられた。

昨年母が歿しまして、其遺物の中に磯の製造に係る九個の玻璃器が有りましたから、参考の爲め今其寫眞を此に掲げて置きます。

『光風』一二明治三八年七月

『光風』一二には、本文献の挿図として黒田による島津齊彬の肖像が掲載されているが、この作品は現在、尚古集成館の所蔵となっている。

本文献中に引用される「紅色瓦羅斯製煉御開ノ事」は、島津齊彬に葉園庭方役として仕え、その科学的諸策を実施する中心人物であった市来四郎（広貫一八二八〜一九〇三年）が編纂した『齊彬公史料』からの抜粋である。同史料については、鹿児島県歴史資料センター黎明館『黎明館企画特別展 薩摩切子』図録（平成十六年一〇月）を参照。